# 付加疑問文

## —「関連性理論」からのアプローチ—

松尾文子

### 0 はじめに

付加疑問文についてこれまで統語的，意味的，あるいは会話における機能などの観点から分析が行われてきた。本論では Sperber & Wilson の「関連性理論」(Relevance Theory) の枠組みを利用して考察していく。次節から，付加疑問文の分析に必要な概念を順次説明し，その後それらを用いて記述していくことにする。

### 1 記述的 (descriptive) と解釈的 (interpretive)

言語による伝達は次のように行われる。話し手は自分の思考 (thought) の解釈 (interpretation) として発話を産出する。他方，聞き手はその発話，すなわち話し手の思考 (original thought) の心的表記 (mental representation) を組み立てる。この場合，発話は話し手の思考の解釈的表現であり，聞き手は話し手の情報上の意図 (informative intention) に関する解釈的想定 (assumption) をすることになる。このように，全ての発話は話し手の思考を表記するために用いられる。

それでは思考とは何を，どのように表記するのであろうか。心的表記には二つのタイプがある。記述的表記と解釈的表記である。記述的表記とは現実世界の事象を記述するもので，命題形式を持ち，表記と表記されているものとの関係は真理条件的である。一方，解釈的表記とは他の命題形式，すなわち (誰かに) 帰属された (attributed) 思考の解釈を表記するものである。二つの命題形式は論理的に類似していればよい。[1] 解釈的表記は類似による表記 (representation by resemblance) (Blakemore (1992 :

106)) であると言える。

発話の命題形式は多かれ少なかれ伝達される思考の命題形式に類似しているという点で，あらゆる発話は話し手の思考の解釈的表記である。しかし，発話の中には解釈的表記をさらに解釈的に表記するものがある。話し手以外の誰かの（あるいは，話し手の過去の）思考の解釈として用いられた発話は，まず第一に話し手以外の人が自分の思考を解釈的に表記したものである。したがって，他の人の思考を解釈するために用いられた発話は，それ自体他の人の思考をさらに解釈的に表記したもの（second-degree interpretaion）である。これを関連性理論では特に解釈的用法と呼ぶ。このことは後述する極性一致の付加疑問文に当てはまる。

解釈的用法の例としては次のようなものがある。疑問発話，感嘆発話，報告発話，エコー発話，そしてエコー発話の一種である，発話の命題形式と発話の表記する思考との関係の解釈的表記のメタファーや，話し手の思考と帰属された思考，すなわち発話との関係の解釈的表記であるアイロニー[2)]が考えられる。このうち，疑問発話，感嘆発話，エコー発話は後にふれる。

## 2　高次の命題記述（higher-level explicature）

発話文の明示的意味（explicature）は，言語的に記号化された論理形式を指示対象などの曖昧性を取り除き，明確化（enrich）することによって得られる。たとえば次の場合を考えてみる。

(1a) Peter : Can you help ?
(1b) Mary (sadly) : I can't.　　— Wilson & Sperber (1993 : 5)

(1b) の Mary の発話で表される命題，すなわち explicature は次のようなものであるかもしれない。

( 2 ) Mary can't help Peter to find a job.　　— *ibid.*

さらに，explicature（2）を高次の記述（higher-level description）に埋め込むことも可能である。

（3）Mary says she can't help Peter to find a job.

（4）Mary believes she can't help Peter to find a job.

（5）Mary regrets she can't help Peter to find a job. — *ibid.*

（3）では発話の力を示す，（4）（5）では命題に対する態度を示す高次の記述に explicature が埋め込まれている。こうして得られた（3）（4）（5）を高次の命題記述と言う。高次の命題記述は中心となる命題の外に現れ，命題全体にかかる。話し手の思考を聞き手がどのように解釈するかによって，さまざまな高次の命題記述が考えられる。

### 3 概念的（conceptual）と手続き的（procedural）

言語構造は二つのタイプの情報を記号化する。概念的情報と手続き的情報である。概念的情報（表記）は，flower, cat のように概念を言語化したもので，それがどのようなものであるか容易に意識化することができる。手続き的情報は概念的表記をどう扱うかに関するもので，発話理解の推論的局面についての手続き的制限を記号化する。すなわち，聞き手が行うことを期待されている推論過程を示す。

ここで「関連性理論」の基本概念にふれておく。この理論はコミュニケーションに認知論的アプローチをしたものである。コミュニケーションの根本原理は関連性（relevance）の追求である。コミュニケーションにおいて，話し手が聞き手の認知環境に変更や修正を加えるとき，文脈効果（contextual effect）を持つと言う。文脈効果が大きければ大きいほど関連性が高い。一方，聞き手が情報を処理する際，文脈や記憶をたどるのに労力が伴う。この処理労力（processing effort）が小さければ小さいほど関連性が高い。コミュニケーションの行為は，最善の関連性（optimal relevance）を伝達する。すなわち，話し手が選んだ刺激（発話）は可能

な刺激の中で最も関連性が高いもので，また聞き手は最小の労力で最大の文脈効果（最善の関連性）が得られるようにその刺激を処理する。最善の関連性とは通常聞き手が最も早く第一番目に解釈するもので（processing effort が最低で），それでいて最も多くの含み（文脈効果）がある，言い換えれば聞き手の頭の中にある情報に大きく影響を与えるものである。文脈効果には次の三種類がある。（1）強化（strengthening）：新情報が聞き手がすでに持っている想定を強化　（2）矛盾（contradicting）：新情報が聞き手のすでに持っている想定と矛盾しているので，古い想定を取り消す　（3）文脈含意（contextual implication）：新情報によって聞き手に別の新たな想定を与える。

関連性理論に則して言えば，聞き手に意図した文脈効果を示すことにより，発話理解に必要とされる情報の処理労力を軽減することになる。手続き的情報は概念的表記とは異なり，推論過程を頭の中で計算するための情報で，その意味内容をただちに意識化することは極めて困難である。談話辞の well, now, so や too などがそうである。

## 4　理論の応用（1）

### 4.1　上昇調で発話される場合

大まかに言って，上昇調で発話される付加疑問文は情報を求める機能があり，下降調で発話される時は聞き手の同意や確認を求める機能がある。まず，上昇調で発話される場合を考えてみる。

（6）He likes his job, *doesn't he*?[3)]

（7）I assume he likes his job ; am I right ?

—Quirk *et al.* (1985 : 811)

（6）は（7）とパラフレーズできる。話し手は仮定的に意見を提示し，聞き手にその真実性に関する情報を求めている疑問文である。疑問発話は話し手の思考と願望思考（desirable thought）の関係を解釈的に表記した

ものである（Sperber & Wilson（1986 : 232））。その発話で表される命題形式は話し手と／や聞き手にとってrelevant（desirable）な解釈的表記である。（6）では「彼は仕事が好きである」という願望思考を話し手が解釈表記している。

（8） "He etched his initials in the cartridge case and left it out there deliberately, *didn't he,* Marino ?"

"Oh, yeah. They found the goddam cartridge case last week. The real one. Then the asshole leaves this goddam plant, starts whining that he was just doing what the FBI told him to do." — P. Cornwell, *All That Remains*（「彼はカートリッジケースに自分のイニシャルを刻んで，故意にあそこに放っておいたのね，マリーノ」「そうだ。やつらは先週あのいまいましいカートリッジケースを見つけたんだ。本物をな。それであのドアホがあれを置いたんだ。FBI が言う通りにやっただけだって泣き言を言いだしやがった」）

検死官と殺人課刑事の Marino との会話である。He（＝the asshole）は州警察の係官。FBI は殺人の証拠品を知られたくないので州警察を使ってニセの証拠品を置いた。しかし，係官が故意に自分のイニシャルを刻んだカートリッジケースを落としたことになると，検死官の仮説が正しいことになる。したがって，付加疑問文で検死官の願望思考を表していると言える。

上昇調の付加疑問文は疑問発話であると述べたが，それが疑問発話であることを示す illocutionary-force indicator は高次の命題記述に関する制限を表す情報である（Sperber & Wilson : 1993）。この場合は付加部がそれに該当する。また，付加部の代わりに 'eh' を文末に付けることも可能である。

(9) She didn't pass the exam, *eh*? —Quirk *et al.* (1985 : 814)

この 'eh' もまた illocutionary-force indicator で，高次の命題記述に関する制限情報である (Sperber & Wilson : 1993)。

**4.2** 下降調で発話される場合

次に下降調で発話される場合を見る。肯定X否定型では 'Yes' の答を期待する (positively conducive (Hudson : 1975))，否定X肯定型では 'No' の答を期待する (negatively conducive (*ibid.*)) 陳述文の機能を持つ。

(10) It wasn't until we were on the Interstate and she was setting the cruise control that she spoke again. "You think they're dead, *don't you ?*"

"Are you asking for a quote ?" — P. Cornwell, *op. cit.* (州間高速道路に入り車をオート・ドライブにセットするとやっと，彼女は話を再開した。「あなた，彼らは死んでいると思ってるのよね」「記事にするつもりなの ?」)

(11) "The CIA is paranoid, Abby, especially about Camp Peary. State police and emergency medical helicopters aren't allowed to fly over it. Nobody violates that airspace or gets beyond the guard booth without being cleared by Jesus Christ."

"Yet you've made that same wrong turn before, as have hundreds of tourists," she reminded me. "The FBI's never come looking for you, *have they ?*"

"No. But I don't work for the *Post.*[4)]"— *ibid.* (「CIA は猜疑心が強いのよ，アビー。特にキャンプ・ピアリーのことにはね。州警察や緊急の医療ヘリコプターでも上空を飛ぶことは許されていないの。神の許しでもない限り誰もあの領空を侵したり守衛室のむこうへは入れないのよ」「でも，観光客と同じようにあなた

だって間違って曲がって入ってしまったことはあるでしょう」と彼女は思い起こさせるように言った。「でも，FBI があなたを探しに来たことなんてないでしょうよ」「ええ。でも，私はポストの記者じゃないわ」)

(10) ではワシントン・ポストの記者が友人の検死官に事件について尋ねている。記者は 'Yes'，すなわち「彼らは死んでいる」ことを期待している。(11) ではワシントン・ポストの記者 Abby が FBI が訪ねて来たことについての憤りをぶちまけている。彼女は 'No'，すなわち「FBI が訪ねて来たことはない」ことを期待している。

また，同じ内容を感嘆文で表すことも可能で (Huddleston : 1984)，この型の付加疑問文は感嘆文の力を持つ (Quirk *et al.* (1985 : 811))。この点では下降調で発話される yes-no 疑問文と似ている (*ibid.*)。

(12) "They showed *Lawrence of Arabia*[5] around here not long ago, the new version. Have you seen it ?"

"I like that movie a lot."

"He was fascinating, *wasn't he* ? There's no equivalent person in American life." — A. Corman, *Prized Possessions* (「最近このあたりで『アラビアのロレンス』をやってたんだ。新しいのだけど見たことある ?」「あの映画大好きよ」「彼，すごく魅力的だよな。アメリカに彼ほど素敵な人は絶対にいないよ」)

ここでは，機能的には "How fascinating he was !" の感嘆文と同じである。

感嘆発話も話し手の思考と願望思考の関係を解釈的に表記したものである (Sperber & Wilson (1986 : 232))。たとえば，How clever Jane is ! の場合，話し手の心の中にはすでに「Jane は利口だ」という考えがあり，Jane が実際に利口だとわかったことが話し手自身にとって relevant なのである。このように，その発話で表される命題形式は話し手にとって re-

levant (desirable) な思考の解釈的表記である。また上昇調の付加疑問文と同様に，illocutionary-force indicator である付加部は高次の命題記述に関する制限の情報である。

### 4.3 まとめ

以上のように下降調であれ上昇調であれ，付加疑問文の付加部は発話の力を示す illocutionary-force indicator であり，高次の命題記述である。話し手の情報的意図の抽象的な部分，すなわちある文脈において発話の関連性が探されるべき方向を示し，発話解釈の推論過程のガイド役となる。

さらに言語化された情報に関して言えば，付加部は手続き的情報である。その情報で発話をどう解釈すべきかを聞き手に示し，発話理解に伴う情報処理労力を軽減することになる。

## 5 理論応用 (2) 極性一致の付加疑問文の場合

### 5.1 エコー発話 (echoic utterance)

これまで極性不一致の付加疑問文[6]について述べてきたが，本節では極性一致の付加疑問文を考察する。極性一致の付加疑問文とは，肯定X肯定型，あるいは否定X否定型をとる付加疑問文である。一般的に言われているように，肯定X肯定型では皮肉，不信，怒り，驚き，興味，親しみといった話し手の感情が表されることがある。否定X否定型も論理的には可能であるが，非常にまれにしか用いられず，相手に対する攻撃や脅しの感情が表される。

(13) So you don't approve of my methods, *don't you ?*

— Declerck (1992 : 192)

次にエコー発話について説明しておかなければならない。エコー発話とは他の誰かの思考や発話，あるいは話し手自身の過去の思考や発話 (attributed thought or utterance) を解釈的に表記したものである。話し

手は他の人の考える（言う）ことを知っていて，それに対して何らかの態度を示すという事実を聞き手に知らせることによって解釈表記をする。何らかの態度は，猜疑心，驚き，皮肉などその時に応じてさまざまに変化する。

(14) Peter : The Joneses aren't coming to the party.
Mary : *They are coming*, hum. If that's true, we might invite the Smiths. — Sperber & Wilson (1986 : 238)

相手（Peter）の言ったことをechoすることによって話し手（Mary）は相手の発話に注目していること，相手の発話の信頼性や意図を理解している証拠を示す。

**5.2** タイプ1

さて，極性一致の付加疑問文に戻る。稲木（1990）には極性一致の付加疑問文には二つのタイプがあると述べられている。「付加部が対応する平叙文」を仮に 'RC'（reference clause）としておく。一つはRCの引用文が文脈において明示的な場合，一つは暗示的な場合である。

まずRCが明示的な場合は相手の言葉をそのまま，あるいは代名詞などを一部変えてechoする。そして「あなたの言葉を私はこう受け止めたが，それでいいですね」の意味を表す。RCが聞き手の意見かどうかを聞き手自身に問うためにechoしており（Cattell : 1973），話し手は相手が言ったことに反応している（Sinclair (eds.) : 1990)。

(15) WOMAN'S VOICE : Mr. Trask's *residence* ?[7] (laughter : then, hoity-toity) To whom am I speaking ?
MARY : This is Trask's maid.
WOMAN'S VOICE : So Mr. Trask has a maid, *has he* ? Well, that's more than *Mrs.*[8] Trask has. — T. Capote, *A Day's Work*

(「トラスクさんのお宅でいらっしゃいますか。(笑い声：それから気取った調子で) あなた，どちら様かしら」「トラスキさんのメイドです」「じゃあ，トラスク氏にはメイドがいるということなのね。トラスク夫人にはいないというのにね」)

Mary は Trask 氏のメイド，電話の主は夫婦仲がうまく行っていない Trask 夫人である。Mary が Trask 氏のメイドだと言うと，夫人は自分にはメイドなんていないのに彼にはいるのね，と皮肉を言っている。ここでは，RC で先行する Mary の発話を echo し「Trask 氏にはメイドがいるということだけど，そうなのね」の意味になり，話し手の態度は皮肉である。

### 5.3 タイプ2

RC が暗示的な場合は相手の言葉を（そのまま）echo するのではなく，それまでに述べられたことや状況を考え合わせ，話し手が推論・解釈し「あなたの次に言いたい言葉はこうだと私は推測するが，それでいいですね」の意味を表す。話し手は相手の言葉を先取りし，それを echo している。また，話し手は相手が含意したことに反応している（Sinclair (eds.) : 1990)。RC が明示的な場合よりも相手の（言いたいであろう）言葉との類似性は低くなる可能性はあるが，やはり echo 発話である。

(16) "We'd like to know how much people had to drink. What we have so far is the girl drank 'a few beers'. Jimmy, you only had two, you say. One at the restaurant and one at the party."

"That's right."

"So she was drinking more than you, *was she ?* And you had one beer, when some of the guys we talked to said they had four and five," Peters said to him. —A. Corman, *op. cit.* (「皆がどれだけ飲んだのか知りたいのです。これまでわかっているのは，

彼女が『ビールを数杯』飲んだということです。ジミー，君は二杯しか飲んでいないと言ったね。レストランで一杯，パーティで一杯」「そうです」「ということは，彼女の方が君よりたくさん飲んでいたということですね。で，君は（パーティでは）一杯しか飲まなかった。私達が話した君の仲間には四，五杯飲んだと言っている人もいるのに」とピーターズは彼に言った）

Jimmy はガールフレンドをレイプした疑いで地方検事の Peters に尋問されている。彼は彼女が酔って誘惑してきたのだと主張している。その日のレストランでのデートや仲間とのパーティの様子を考え合わせ，そこから推測して「あなたは彼女の方がたくさん飲んでいたと言いたいのだと私は思いますが，そうですか」と言っている。RCは話し手の推論結果である。（15）（16）のように，この型では 'so' や 'oh' が先行することが多いが，この二語は話し手が相手の言葉や状況から推論によってある結論に達したこと，相手の言葉を受け止めたことを示す語である。

### 5.4 極性一致の付加疑問文に伴う感情

極性一致の付加疑問文の感情的意味合いについてふれておく。このタイプの付加疑問文は何らかの感情的含意を伴うことが多いと言われる。エコー発話は話し手があることを知っていること，そして同時にそれに対する態度を示す解釈表記であると先に述べた。その態度には，皮肉，驚き，不信などが考えられる。また，付加疑問文が相手に対する単なる反応や確認として発話された場合は，感情的色彩は弱い。しかし，反論や疑問を投げかける発話では話し手は聞き手に 'not RC' という答を期待する。ところが，意に反して「RC だ」と答が返ると，驚き，憤り，皮肉のような強い感情を表すことになる（稲木：1990）。

## 6 むすび

以上，付加疑問文を「関連性理論」の枠組みで考察してきた。付加疑問

文は解釈的表記であること，付加部は高次の命題記述であり，発話理解の推論過程における手続き的情報を言語化していることを述べた。

しかしながら，この枠組みでは捉えにくい事柄もある。たとえば，丁寧表現として用いられる付加疑問文である。Holmes（1984）によると，付加疑問文には modal meaning と affective meaning があり，さらに後者には聞き手に対する連帯感や肯定的態度を示す facilitative（positive politeness）と，丁寧さや聞き手の気持ちに話し手が関心や気遣いを持っていることを示す softening（negative politeness）の意味がある。また，Celce-Murcia & Larsen-Freeman（1983）では，付加疑問文の談話上の機能として会話の継続や開始を示す，いわゆる会話の進行役を果たすと記されている。しかし，これは異なるレベルの問題で，むしろ社会言語学的，あるいは談話分析的なアプローチがなされるべきであろう。

**脚　注**

1）「類似している」とは次のような場合を言う。
　(1)　同じ言語構造と意味構造を持つ
　(2)　同じ意味構造を持つ
　(3)　同じ命題形式を持つ
　(4)　何らかの論理形式を持ち，二つの表記がある文脈に置かれると同じ文脈含意を持つ（Sperber & Wilson 1986 : 227-228）.

2）メタファー，アイロニーに関しては Sperber & Wilson（1981）（1986）を参照。

3）以下，特に断りのない場合，イタリック部は筆者による。

4）原文ではイタリック体。

5）同上。

6）Huddleston（1984）では極性不一致／一致の付加疑問文をそれぞれ，reversed／constant polarity tag, Cattell（1973）では contrasting／matching tag と呼ぶ。また，極性一致の付加疑問文を Declerck（1992）では same-say tag, Celce-Murcia & Larsen-Freeman（1983）ではmarked tag, Swan（1980）では same-way question-tag と呼ぶ。

7）原文ではイタリック体。

8）同上。

## 参考文献


Alexander, L. G. 1988. *Longman English Grammar.* London : Longman.

Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances.* Oxford : Blackwell.

Cattell, R. 1973. "Negative transportation and tag questions." *Language* 49, 612-639.

Celce-Murcia, M. & D. Larsen-Freeman. 1983. *The Grammar Book.* Rowley : Newbury House.

Declerck, R. 1992. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English.* Tokyo : Kaitakusha.

Holmes, J. 1984. "Hedging your bets and sitting on the fence : some evidence for hedges as support structures." *Te Reo* 27, 47-62.

Huddleston, R. 1984. *Introduction to the Grammar of English.* CUP.

Hudson, R. A. 1975. "The meaning of questions." *Language* 51, 1-31.

稲木昭子. 1990.「極性一致の付加疑問文—談話の流れの中で—」『言語研究』97, 73-94.

————. 1992.「談話分析—Cp付加疑問文とEcho発話の場合」『成田義光教授還暦祝賀論文集』, 217-228.

Lyons, J. 1988. *Semantics.* CUP.

McCawley, J. D. 1987. "The syntax of English echoes." *CLS* 23, 246-258.

Quirk, R. *et al.* 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London : Longman.

Sperber, D. & D. Wilson. 1981. "Irony and the use-mention distribution." in P. Cole (ed.) *Radical Pragmatics,* 295-318.

————. 1986. *Relevance : Communication and Cognition.* Oxford : Blackwell.

Swan, M. 1980. *Practical English Usage.* OUP.

Wilson, D. & D. Sperber. 1993. "Linguistic form and relevance." *Lingua* 90, 1-25.


## 引用作品


Capote, T. *A Day's Work* (1980)

Corman, A. *Prized Possessions* (1992)

Cornwell, P. *All That Remains* (1992)